

第1章 転移してきた女勇者の末路

プシュッ。

缶を開ける音が、一人暮らしの二DKアパートに響いた。仕事帰りのOLが手に持つのは、ストロングゼロ・レモンサワー五〇〇ミリリットル缶である。一日の疲れを癒すための、唯一の楽しみだった。

「はあ、今日もクソだったわ……」

リヴィアは大きなため息をつきながら、スーツのジャケットをソファに投げ捨てた。金髪のポニーテールもすでに崩れかけ、疲労で片方の靴下だけ脱げている。なんとも言えない疲労感と諦めが顔に張り付いているが、それでもストゼロへの渴望だけは輝いていた。

二十九歳。独身。一般企業の事務職員。年収300万円。マッチングアプリの「いいね」は月に2件。

どこにでもいる、ごく普通の——いや、むしろ絶望的に冴えない部類のOLである。しかし元勇者という肩書きだけは世界でもトップクラスだ。

「カエザル、ただいま」

リヴィアは居間の奥に声をかけた。そこにはテレビに向かって座っている小学生くらいの少年の後ろ姿がある。黒髪をわしゃわしゃとした、どこか憂いを帯びた表情の美少年だった。

「おかえり、リヴィア。今日も遅かったではないか」

振り返ったカエザルは、手にニンテンドースイッチのコントローラーを握りしめている。テレビ画面には大乱闘スマッシュブラザーズのタイトル画面が映し出されていた。

「残業よ、残業。どうせサビ残だけだね。今日もコピー機と格闘してたわ。昔は魔王と戦ってたのに、今は複合機の紙詰まりと戦ってるなんて……それより、宿題はどうなのよ？」

「とうに終わらせておるわ。算数のドリル程度、魔王の頭脳には朝飯前である。それよりもリヴィア、今日はマリオを使ってみてはどうであろう？ その様では君のカービィでは限界があると思うのだが」

小学生とは思えない落ち着いた口調——というより完全に上から目線で、カエザルはそう提案した。リヴィアはストゼロをぐいっと一口飲んでから、ソファにドスンと座り込む。スカートが少しめくれたが、気にする気力もない。

「うっさいわね。カービィが一番可愛いだよ。ピンクでまん丸で、今の私の心境そのものじゃない。あと、これ開けといて」

リヴィアは手元にあった一缶のビールをカエザルに差し出した。しかし、カエザルは苦笑いを浮かべながら、テレビ台の上に置いてあるものを指差す。

「それであれば、いつものアレで開けてはどうであろう？」

テレビ台の上には、美しく輝く長剣が横たえられていた。刀身は銀色に輝き、柄頭には神々しい宝石があしらわれている。見るからに神秘的で、高貴な雰囲気醸し出す逸品だ。

聖剣カリバーン。

かつて異世界で魔王を討ち取った、伝説の剣である。神々の祝福を受け、一振りで山を割り、闇を払う究極の聖剣。

しかし、現在のリヴィアは何の躊躇もなく——むしろ慣れた手つきで、その聖剣を手に取り、ビール缶の栓抜き部分にあてがった。

プシュッ。

「よし、開いたわ。やっぱ聖剣って便利よね～」

聖剣をビールの栓抜きとして使用する元勇者。これ以上に墮落した光景があるだろうか。ちなみに聖剣の先端部分には、缶の跡がうっすらと付いている。

「……まったく」

カエザルは呆れたような顔をしながら、手元のファンタオレンジを開けた。こちらは普通にプルトップを使っている。10歳の手には少し大きいサイズ缶である。

「何よその顔。便利でいいじゃない。神の加護付きの栓抜きなんて、世界に一つしかないのよ？」

「その使用用途で神の加護が発動するとは思えんが……まあ、君がそう申すのであれば、構わぬ」

元魔王も元勇者の墮落ぶりには慣れっこである。

二人は並んでソファに座り、テレビゲームを始めた。リヴィアはカービィを、カエザルはマリオを操作する。画面の中で2つのキャラクターが激しくバトルを繰り広げていた。

「あー、やられたわ！ カエザル、ちょっとは手加減しなさいよ。魔王軍No.1の実力、小学生相手に本気出すのずるくない？」

「戦いに手加減は無用であろう。それに君も、昔はもっと強かったではないか。今のざまを見ておると、本当にあの時の勇者かと疑いたくなる」

「昔は昔よ。今はもうただのダメ人間なのよ。まあ、ゲームでも負けるようになったら、本格的にオワコンね」

リヴィアはストゼロを再び一口飲んだ。アルコールが体に染み渡り、今日一日の嫌なことを忘れさせてくれる。そう、今日もまた職場で嫌なことがあった。

「それは別部署の管轄ですので、申し訳ございませんが...」

上司から振られた面倒な案件を、いつもの決まり文句で回避したときのことを思い出す。この決まり文句、もはや口癖レベル。同僚たちは「リヴィアさんって仕事できるよね」なんて言ってくれるが、本当のところは単に面倒を華麗にスルーしているだけである。元勇者のスルー技術は一級品だ。

「やる気なんて出るわけじゃない。毎日同じことの繰り返しで、何が楽しいのよ。昔は世界の平和とか守ってたのに、今は売上管理のエクセルよ？ しかも関数がよくわからないし」

「そうであるか。だが、君は本来もっと輝いておったと思うのだが。今は.....まあ、その.....」

カエザルの言葉に、リヴィアは苦笑いを浮かべた。昔の自分を知っている人間——しかも敵だった相手に言われると、なんとも言えない複雑な気持ちになる。

そう、昔の自分は確かに輝いていた。

五年前——

「魔王カエザルよ！ 今こそお前を討つ！」

金色に輝く鎧を身にまとった女騎士が、暗い魔王城の玉座に向かって聖剣を振りかざしていた。リヴィア・クロスフィールド、二十四歳。異世界エルデンシアが誇る最強の女勇者である。

魔王城の最深部、玉座の間。そこに座るのは、まだ少年の面影を残した美しい魔王だった。

「よくここまで来たな、勇者よ。だが、ここで終わりだ」

魔王カエザルは玉座から立ち上がり、手に黒い剣を構えた。二人の間には、これまで積み重ねてきた無数の戦いの記憶がある。

「エルデンシアに平和を！」

「魔族の誇りにかけて！」

2つの剣が交差した。光と闇がぶつかり合い、城全体が激しく揺れ動く。これが、後に「世紀の決戦」と呼ばれることになる、最終決戦だった。

そして――

「私の勝ちよ、魔王」

聖剣の切っ先が、魔王の喉元に突きつけられていた。

そして、現代日本に転移したばかりの頃

「ここが現代日本……」

見慣れない風景に戸惑いながらも、リヴィアの目には希望の光があった。新しい世界での新しい人生。きっと何か素晴らしいことが待っているに違いない。

「よし、頑張りましょう！」

あの頃の彼女は、まだ前向きだった。

そんなある日、アパートの玄関に一通の手紙が届いた。

親愛なる元勇者様へ
魔王討伐お疲れ様でした♪
ささやかなプレゼントです。
大切に育ててくださいね❤️

女神の贈り物♥

P.S. 取扱説明書は付いていません。頑張っ♥て

「なによこれ？ またエリュナの嫌がらせ？」

手紙と一緒に置かれていたのは、小学生くらいの黒髪の少年だった。眠っているその顔を見た瞬間、リヴィアは驚愕した。

「え……カエザル？」

魔王が、なぜか小学生の姿で送りつけられてきたのである。

「あのクソ女神……また面倒なもん送りつけやがって。しかも取扱説明書なしとか、どんな嫌がらせよ。『大切に育ててください』って、ペットじゃないんだから！」

「あの頃は良かったわよねえ……まさか5年後、聖剣で缶ビール開けてるとは思わなかったわ」

現在のリヴィアは、ストゼロを飲みながらぼんやりと過去を振り返っていた。転移してきたばかりの頃は確かに、新しい人生への希望があった。「現代日本で新しいスタート！」なんて張り切っていた時期もあった。正義のために戦った誇りも、まだ胸に残っていた。今は胸にあるのはブラの跡だけだが。

それが今では、ストロングゼロに依存する絶望的負け組OLである。元勇者の肩書きが泣いている。

「あの時はまだ、バカみたいにやる気があったのよね。『私が責任持って魔王を更生させる！』とか言ってたし」

魔王が送りつけられてきた時も、最初は責任感があった。「魔王を更生させて、この世界で立派に生きていけるようにしよう」なんてまじめに考えていた。更生プログラムまで作りかけた。

それが今では、一緒にスマブラをして、ファンタを飲ませて、完全に墮落した共同生活を送っている。更生どころか、一緒に墮落している。

「リヴィア」

カエザルが呼びかける声に、リヴィアは現実に戻された。

「何よ？」

「君は今でも、あの時の勇者だと思っておるか？」

「.....わかんないわよ、そんなの」

リヴィアは正直に答えた。自分でもわからないのだ。あの頃の自分と今の自分が、果たして同じ人間なのかどうか。

「そうであるか。だが、少なくとも俺は、君がどのような姿になろうとも、あの時の勇者だと思っておるぞ」

「なんでよ。私なんて、もうただの酒に逃げてるダメ人間よ。今日だって、プリンターの紙詰まりに30分も格闘してたのよ？ 昔の私ならドラゴンと30分格闘してたのに」

「それでも、君は君であろう。.....ただし、プリンターとの戦闘力は確実に落ちておるな」

カエザルの言葉に、リヴィアは少し胸が熱くなった。こいつは昔から、こういう妙にかっこいいことーからの毒舌コンボを決める奴だった。

「まあ、どうでもいいわ。今日はもう寝るわよ。明日もまた、コピー機と格闘する日々が待ってるし」

リヴィアは残ったストゼロを一気に飲み干しー少しむせながら立ち上がった。明日もまた、面白くもない会社に行かなければならない。電車は混むし、上司はうざいし、昼食はコンビニ弁当だし。

「おやすみ、リヴィア」

「おやすみ、カエザル」

部屋の電気を消して、リヴィアは寝室に向かった。聖剣カリバーンは、相変わらずテレビ台の上で静かに光を放っている。

かつて世界を救った伝説の剣が、今では酒の栓抜きと化している。しかも使用頻度が高すぎて、刃先に小さな欠けまでできている。

これ以上に皮肉な現実があるだろうか。元勇者の転落人生、ここに極まれり。

だが、それでも明日は来る。リヴィア・クロスフィールド、二十九歳の、新しい（でも多分昨日と同じような）一日が。

文字数: 約4,100文字 次章への伏線: 魔王軍の襲撃予告、日常への刺激 キャラクター状況:
リヴィア（墮落した日常に慣れきっている）、カエザル（リヴィアの現状を受け入れつつ
見守る）

第2章 魔王軍（自治体申請済み）襲来！

翌日の土曜日の朝、リヴィアは二日酔いでぐったりとしていた。昨夜のストゼロが効きすぎて、頭がガンガンと痛む。

「うう、クソ気持ち悪いわ.....」

「リヴィア、またであるぞ」

カエザルがポストから取ってきた郵便物を見せにきた。その中に、見慣れた奇妙なチラシが混じっている。

「またきやがったわ！」

リヴィアは頭痛も忘れてキレた。もう何回目かわからない、魔王軍からの律儀すぎる戦闘予告だった。

【第47回 勇者討伐作戦 実施のお知らせ】

日時: 本日午後2時より

場所: 三丁目公園

主催: 魔王軍一同（自治体申請済み）

見学: 可能（専用エリアをご用意しております）

お問い合わせ: 090-xxxx-xxxx（ヴァルグ）

近隣住民の皆様にはご迷惑をおかけしますが、何卒ご理解のほどよろしくお願いいたします。なお、戦闘終了後は清掃活動も実施予定です。

「第47回って何よ第47回って！ もうシリーズ化してんじゃないのよ！ 返し討ちにすら側も飽きるわよ！」

リヴィアは完全にブチギレた。これまで散々襲撃を受けて、毎回聖剣で返し討ちにしてきた。もはやチャンバラではなく、日常。定期イベント。それなのにまだ懲りずにやってくる。

「しかもまた自治体申請済みって.....マジで面倅くさいわ」

「ヴァルグのことだ。今回もきちんと役所に行って手続きをしたのだろう。それどころか、先日市民税もきちんと納めていたぞ」

カエザルは呆れたというより、むしろ感心したような顔をしていた。魔王軍のナンバー2であるヴァルグは、異常なまでに生真面目な性格で、現代社会のルールをリヴィアよりも完璧に守っている。住民税、国民健康保険、年金もきちんと支払っている優良市民。

「あいつ、何度返り討ちにあっても懲りないのよね。学習能力ってもんがないの？」

リヴィアはため息をついた。これまで何度もヴァルグに泣きながら土下座されて、魔王の帰還を懇願されてきた。そのたびに殴って追い返していたのだが、全く諦める気配がない。

「お中元とお歳暮も毎回送ってくるし、ほんとウザいわよね」

「それは、俺への忠義の表れであろうからな……」

「あんたが止めさせなさいよ」

「俺が何を言っても聞かぬのだ。あいつは昔からああいう奴である」

リヴィアは渋々立ち上がった。また面倒な戦闘をしなければならない。

午後2時、三丁目公園。

リヴィアとカエザルが現場に到着すると、そこには信じられない光景が広がっていた。

「お疲れ様です！　こちらが見学エリアになります！」

公園の入り口では、角の生えたオーガが手作りの看板を持って案内をしている。見学エリアには既に数十人の近隣住民が集まり、まるで学園祭のような和やかな雰囲気だ。

「あ、ポップコーンいかがですか〜！」

小鬼族のゴブリンが、手押し車でポップコーンを売り歩いている。完全にお祭り状態である。

「なによこのカオス……」

リヴィアは呆然とした。魔王軍の襲撃というより、地域のイベントにしか見えない。

「勇者よ！　今回こそ必ず！　毎回毎回同じこと言っててすみませんが！」

公園の中央で大きな声が響いた。そこに立っていたのは、黒い鎧を身にまとった筋骨隆々の魔族、ヴァルグだった。頭にはスポーツタオルを巻いている。何故か、気合いが入っている。

「また来やがったわねヴァルグ！ いい加減にきなさいよ、もう！」

リヴィアは怒鳴った。もううんざりだった。5年前の最終決戦では確かにカエザルの右腕として強敵だったが、今ではただの迷惑な常連客でしかない。

「魔王様をお返しいただく！ それが叶わぬなら、力づくでも！」

ヴァルグは堂々と宣戦布告した。しかし、その周りでは他の魔族たちが交通整理用のコーンを設置したり、「危険ですので黄色いテープより内側にお入りください」という看板を掲げたりしている。

「あの、すいません」

見学エリアから一人の主婦が手を挙げた。

「戦闘はどのくらいの時間を予定されていますか？ 夕飯の支度があるので」

「申し訳ございません！ 予定では30分程度を考えておりますが、長引く場合は随時お知らせいたします！」

ヴァルグが丁寧に応答する。完全に地域住民への配慮が行き届いている。

「なんなのよこれ……」

リヴィアは頭を抱えた。これが魔王軍の襲撃だろうか。

「リヴィア、とりあえず聖剣を」

「あー、はいはい」

リヴィアは面倒くさそうに聖剣カリバーンを手に取った。昨夜栓抜きとして使ったばかりなので、まだビールの匂いが微かに付いている。

「では、始めさせていただきます！」

ヴァルグが号令をかけると、魔王軍のモンスターたちが一斉に攻撃を仕掛けてきた。

「うおおおお！」

スケルトンやゾンビ、オーガにゴブリンと、まさに魔王軍らしい面々である。しかし、なぜか全員が「すみません！」「危ないので下がってください！」など、やたらと礼儀正しい。

「ったく、めんどくさいわね」

リヴィアは聖剣を振るった。たとえビールの栓抜きに成り下がっていても、聖剣カリバーンは伝説の剣である。魔族たちは次々と光に包まれて消えていく。

「うわー、やられたー」

「すみませんでした〜」

倒れたモンスターたちは、なぜか観客席に向かって一礼してから消滅していく。完全にプロレス的なエンターテインメントだ。

「ぐああ！ さすがは勇者！ だが、これはどうだ！」

ヴァルグが最後の切り札として、巨大な魔法陣を展開した。そこから現れたのは.....

「あれ、また犬サイズのドラゴン？」

確かにドラゴンだった。しかし、いつものように中型犬くらいのサイズである。

「きゅるるー」

可愛らしい鳴き声を上げる小型ドラゴン。観客席からは相変わらず「可愛い！」「写真撮らせて！」という声上がる。

「あんた、毎回同じドラゴンじゃないの。金欠なら襲撃やめなさいよ」

「魔王軍にも活動資金の限りがある！ それでも魔王様のためなら！」

「知ったことかバカ！」

相変わらず現実的すぎる理由に、リヴィアの怒りは頂点に達した。

「ウッセーんだよ雑魚！」

リヴィアは完全にキレた。47回目の戦闘が、毎回こんな茶番劇だなんて我慢できない。

「本気でやりなさいよ本気で！ 私を誰だと思ってんのよ！ 47回も来て毎回この程度って、ナメてんじゃないわよ！」

聖剣カリバーンが輝きを増す。たとえビールの栓抜きとして愛用していても、中身は本物の聖剣だ。

「うおおお！ これぞ真の勇者！」

ヴァルグの目が輝いた。久々にリヴィアの本気を見ることができて、感激している。

「ストゼロ箱で献上しろ！」

「え？」

「私が欲しいのは戦いじゃないわよ！ ストゼロよ！ 1箱24缶入りのやつ！ それを毎月献上しなさいよ、そしたら魔王返してあげるから！ あ、できればプレミアム版で！」

完全に現代の酒飲みOLと化した要求だった。しかもグレードアップしている。

「そ、そんな要求が……」

「あ、あとファンタもよ。カエザルの分」

「承知いたしました！」

ヴァルグは即座に了承した。魔王の帰還に比べれば、ストゼロとファンタの定期配送など安いものである。

「では、これにて第47回勇者討伐作戦を終了いたします！ ご見学いただいた皆様、ありがとうございました！」

観客席から拍手が起こる。完全に地域のイベントとして成功していた。

同じ頃、天界では――

「ぎゃははははは！ 何それ、超ウケる！」

天界の玉座で、銀髪の美少女が水晶玉を見ながら大爆笑していた。創造神エリュナである。

「ストゼロ箱で献上って、あんたマジでどうしちゃったのよ」

エリュナは手元のポップコーンを口に放り込みながら、リヴィアの戦いぶりを観戦していた。

「でも、まあ面白いじゃない。魔王軍の方が社会に適応してるなんて、皮肉よね～」

創造神の采配で現代に転移させられた面々だが、適応力に関してはリヴィアが一番ダメだった。

「さて、次はどんな騒動を起こしてくれるかしら」

エリュナは楽しそうに呟いた。この世界の騒動は、全て彼女の掌の上で起きている出来事なのだ。

「でも、そろそろ本格的に動いてもらわないとねえ」

水晶玉の中では、リヴィアとカエザルが近所のコンビニでストゼロとファンタを買い込んでいる姿が映っていた。

まだまだ、物語は始まったばかりである。

第3章 妹と過去とグラタン

日曜日の朝、リヴィアは二日酔いと戦いながらカレンダーを眺めていた。そこには赤いマーカで大きく丸印が付けられている。

「今日はセリナが来る日だったわ.....クソ、忘れてた」

慌てて時計を見ると、もう午前10時を過ぎている。セリナは11時に来る予定だ。

「カエザル！ やばいわよ！ 妹が来ちゃうの！」

「ああ、そうであるか。それは大変であるな」

カエザルは相変わらずスマブラをしながら、のんびりと答えた。彼にとってはいつものことでも、リヴィアにとっては一大事である。

リヴィアは慌てて掃除を始めた。といっても、昨夜も夜通し掃除をしていたのだが、肝心なところで力尽きてしまったのだ。

「あー、クソヤバい、マジヤバい！完全にホラー映画の始まりじゃん！『部屋に住む謎の生物と墮落した姉』ってタイトルで映画化決定よ！」

部屋の片隅には、相変わらずストゼロの空き缶が小さなタワーを築いている。昨夜飲んだ分も含めて、すでに10缶近くが積み上がっていた。まるでアルコール依存症者の現代アートである。

「これ、マジでどうしよう.....インスタ映えする『ストゼロタワーチャレンジ』として売り出す？いや、それはヤバすぎるわね.....」

慌てて空き缶をゴミ袋に詰め込む。ガシャガシャと音を立てる空き缶の音が、まるで犯罪現場の証拠隠滅BGMみたいだ。冷蔵庫の中身も相変わらず、マヨネーズとストゼロと賞味期限切れの味噌チューブだけ。この3つで料理番組に出たら、確実に『極限料理人』としてバズれる自信がある。

「せめて野菜くらい買っておけばよかったわよ.....コンビニのサラダも野菜カウントしていいわよね？え、ダメ？マジで？」

そんな時、玄関のチャイムが鳴った。

「お疲れさまです、姉さん」

扉を開けると、そこには美しい女性が立っていた。セリナ・クロスフィールド、26歳。リヴィアの妹で、元聖女である。

長い栗色の髪を上品にまとめ、清楚なワンピースに身を包んだ彼女は、どこからどう見ても勝ち組の女性だった。手には掃除道具の入ったバッグと、手作りらしき料理の入った紙袋を持っている。

「あ、セリナ……」

「またストゼロの匂いがします」

セリナは部屋に入るなり、鋭く指摘した。さすが妹、容赦がない。

「そ、そんなことないわよね〜♪」

完全に棒読み。小学生の演技指導でももう少しマシである。

「嘘をつくのはやめてください。あと、なぜカエザル君は朝からゲームをしているのですか？日曜の朝といえば『サザエさん』か『仮面ライダー』でしょう？」

「おはようである、セリナ」

カエザルは振り返って挨拶したが、手はコントローラーから離さない。画面では『大乱闘スマッシュブラザーズ』のピカチュウが敵を電撃で吹っ飛ばしていた。彼にとってセリナは、リヴィアを叱ってくれる都合の良い『お小言役』でもあった。まるでRPGの便利なNPCである。

「まったく……」

セリナはため息をつきながら、持参した掃除道具を取り出した。

「姉さん、クローゼットを開けてみてください」

「え、なんでよ？」

「いいから開けなさいよ」

恐る恐るクローゼットを開けると、そこには使い込まれた下着類が無造作に詰め込まれていた。しかも上下がバラバラで、明らかにしまむらの激安品ばかり。『しまむら下着コ

レクシヨン2015～2020』とでもタイトルを付けられそうな、ある意味歴史的価値のあるラインナップである。

「これ……まだ同じものを着ているのですか？」

セリナの声が震えている。

「だって、まだ使えるじゃないのよ……」

「姉さん、これは5年前に異世界で買ったものですよ？」

「まあ、そうだけどさ……」

「そして、これは……」

セリナがベランダの方を見ると、洗濯物が干されていた。その中に、ゴムが完全に伸びきったラッコ柄の下着が風に揺れている。

「あああああああ！」

セリナが悲鳴を上げた。

「姉さん！ 下着を外に干すのはやめてください！ セめて柄物はやめてください！
というか、そのラッコ柄、10年ものじゃないですか！」

「これは戦場でも守ってくれた勝負パンツなのよ！10年間、私の貞操と尊厳を守り抜いた戦友なのよ！」

「もはや何と戦っているのか、私にはよくわかりません！というか、そのラッコたち、もはや原形をとどめてませんよ！？」

セリナは涙目になりながら、ラッコ柄下着を室内に取り込んだ。

「あと、冷蔵庫の中身も見せてください」

「え、それはヤバいわよ……」

観念したリヴィアが冷蔵庫を開けると、予想通りの惨状が広がっていた。マヨネーズとストゼロと賞味期限切れの味噌チューブ。それ以外には何もない。まるで『究極のミニマリスト』か『終末世界のサバイバー』の冷蔵庫である。

「姉さん、これで生活しているのですか？」

「コンビニ弁当だってあるじゃないの。ちゃんと野菜も入ってるしさ。ほら、ポテトサラダとか.....あ、じゃがいもは野菜よね？」

「それは野菜とは言いません！というか、ポテトサラダの『サラダ』は飾りです！騙されちゃダメです！」

セリナは深くため息をつくと、持参した紙袋から手作りのグラタンを取り出した。

「とりあえず、これを冷蔵庫に入れておきますね。今度から、もう少しまともな食事をしてください」

「ありがとう、セリナ.....」

リヴィアは素直に謝った。妹の献身的な愛情が、胸に突き刺さる。

「姉さんは昔、あんなに立派だったのに.....」

セリナがぼつりと呟いた。その言葉に、リヴィアは過去を思い出した。

異世界での日々――

「姉さん、すごいです！」

聖女見習いだったセリナが、目を輝かせてリヴィアを見上げていた。金色に輝く鎧を身にまとった女騎士は、確かに誇り高く美しかった。

「世界を救う勇者なんて、憧れます！」

あの頃のセリナは、いつも姉を尊敬の眼差しで見ていた。同時に、偉大すぎる姉への複雑な感情も抱えていたが、それでも誇りに思っていた。

そんな頃、パーティには頼れる仲間たちがいた。

「リヴィア、背中任せろ！」

騎士団隊長のレオが、いつものように力強く宣言する。短髪でワイルド系のイケメンである彼に、リヴィアは「ちょっといいな」と思っていた。

戦場で背中を預け合う仲。いつしか芽生えた淡い恋心。

「レオ.....」

しかし、エリュナの采配により、リヴィアは一人で転移先に送られた。セリナとレオは別の場所に転移させられ、再会した時には.....

「姉さん、紹介します。レオです」

「よろしくお願いします、リヴィアさん」

「セリは俺が守る！」

2人は恋人同士になっていた。

あの時の絶望感を、リヴィアは今でも覚えている。

「姉さん？」

セリナの声で現実に戻された。

「なんでもないわよ」

「本当に、大丈夫ですか？ 最近、またお酒の量が増えているような.....」

「私は悪くないわよ！」

リヴィアは反射的に強弁した。いつものように、責任を他に転嫁するプロである。職場でもこのスキルを発揮して、上司から『責任転嫁の達人』と呼ばれている。

「全部エリュナのせいよ！ あのクソ女神がめちゃくちゃな采配するからよ！ 転移先でガチャったら一人ぼっちだし、レオとセリナをくっつけたのもあいつの仕業よ！ 人生をめちゃくちゃにする天才よ！」

「姉さん.....」

セリナの表情が悲しそうに曇った。

「でも、姉さんが幸せじゃないと、私も幸せじゃないんです」

その言葉に、リヴィアはハッとした。

「セリナ.....」

「昔の姉さんは、世界で一番輝いて見えました。今でも、その姿を覚えています」

セリナの目に涙が浮かんでいた。

「だから、諦めません。姉さんがまた笑顔になれるまで、私はずっとここにいます」

「.....ごめんなさい」

リヴィアは素直に謝った。妹の無償の愛に、胸が締め付けられる。

「いいえ、謝らないでください。ただ、もう少しだけ、自分を大切にしてください」

セリナは掃除を終えると、グラタンの温め方を説明して帰っていった。

一人になったリヴィアは、冷蔵庫から手作りのグラタンを取り出した。レンジで温めて、一人で食卓に座る。

「美味しい.....」

温かいグラタンが、冷えた心を少しだけ温めてくれた。妹の愛情がこもった手料理に、涙が頬を伝った。

「カエザル、あんたも食べる？」

「ああ、いただかせてもらおう」

2人で分け合って食べるグラタンは、いつものコンビニ弁当とは全然違っていた。

その夜、リヴィアは久しぶりにストゼロを控えめにした。まだ少しだけ、妹への罪悪感が残っていたからである。

「明日からは、もう少しともに生活しようかな.....」

そんな風に思ったが、翌日にはまた同じような生活に戻ってしまうのが、リヴィア・クロスフィールドという女性だった。まさに『3日坊太郎』の心境である。「明日から本気でダイエットする」と「明日から本気で勉強する」と「明日から本気で禁酒する」を毎日唱えている。

それでも、妹の愛情は確かに心に届いている。セリナの手紙が物語るように、諦めない愛情が、いつかりヴィアを救うことになるのかもしれない。ただし、その日が来るまでにリヴィアがアルコール中毒で入院しないことを祈るばかりである。

第4章 ショタ魔王との距離感

平日の夕方、リヴィアが会社から疲れて帰ってくると、いつもと違う光景が目に入った。

「.....あなた、何してんのよ。つか、顔赤くない？」

部屋の隅で、カエザルが毛布をかぶって正座していた。いつものように威風堂々とした様子はなく、なんだか小さく縮こまっている。

「体が.....重い.....世界の重力が増したのであろうか.....？」

カエザルの声はいつもよりも弱々しく、明らかに体調が悪そうだった。

「いや.....これは....."熱".....というやつであらうか.....？」

「熱って、まさか風邪なの？」

リヴィアは慌ててカエザルに近づいた。額に手を当てると、確かに熱い。

「魔王が風邪って.....マジで意外よね」

人生初の発熱により、普段は尊大なカエザルが完全にポンコツ化していた。

「ハア！？どうしたらいいのよ！？ポーション？ないじゃない！！え、魔力回復？できないし！？氷魔法？え、保冷剤ってどこにあんの！？え、死ぬの？死なないわよね！？」

リヴィアは完全にパニック状態だった。普段は「私は何においても冷静」とか言ってるくせに、いざという時の人間力はゼロである。フライパン片手にうろうろと部屋を歩き回る。

「とりあえず.....おかゆよね？」

おかゆを作ろうとして鍋に水を入れ、火にかけた。しかし、慌てすぎて火力を調整し忘れ、炎魔法のような勢いで鍋を溶かしかけた。

「あー！鍋がヤバい！」

「.....勇者よ.....静かにしてくれである.....」

カエザルの弱々しい抗議に、リヴィアはハッとした。

「保冷剤.....保冷剤はどこよ！？」

冷凍庫を開けると、冷凍食品の下に保冷剤があった。しかし、冷凍庫の調子が悪くて、保冷剤は全然冷えていない。

「これじゃダメじゃないの！」

「冷えピタ買ってくるわ！」

リヴィアは慌てて外に飛び出した。しかし、コンビニでレジに並んだ時、財布を忘れたことに気づいた。

「すみません、財布忘れちゃいました.....」

店員さんに謝って、とぼとぼと帰宅。もう完全にダメ人間である。

「最終的に.....ウーバーでおかゆ頼むわよ」

現代人の最終奥義、デリバリーサービスに頼ることにした。

30分後、ようやく冷えピタとおかゆが届いた。

「カエザル、冷えピタ貼ってあげるわよ」

「.....クソ.....なんで私が.....こんな可愛い寝顔の.....いや、違うわよ！なんで魔王の看病なんてしなきゃいけないのよ！」

リヴィアは魔王の額に冷えピタを貼りながら、内心で葛藤していた。

「あんた、世界を滅ぼしかけたんでしょ！？今、私におかゆ運ばせてもらってんじゃないの！？罪深いにも程があるわよ！！」

「.....勇者よ.....もう少し、静かにしてくれである.....うるさい.....」

カエザルの声はガサガサで、普段の威厳は全くない。しかし、その弱った様子が妙に愛らしく見えて、リヴィアの母性本能が刺激されていた。

「はい、おかゆよ。ちゃんと食べなさいな」

「.....ありがとうである」

素直に感謝するカエザルを見て、リヴィアの心は複雑だった。

その夜、カエザルが寝てからも、リヴィアは彼の様子を気にしていた。時々うわごとを言っているのが聞こえる。

「リヴィア.....背中を、任せたぞ.....」

「うわああああやめなさいよそれ反則セリフでしょおおおお！！！」

リヴィアは思わず叫んだ。昔の戦場を夢に見ているのか、カエザルは昔のことを呟いていた。あの頃のように、お互いを信頼し合って戦った日々。

「.....なんで私、こんなドキドキしてんのよ.....」

寝顔を見つめていると、胸がドキドキしてくる。可愛らしい寝息を立てるカエザルに、なんだか母性を感じると同時に、別の感情も芽生えていた。

「さすがにこれは犯罪よね.....」

慌てて妹にLINEを送る。

📱 深夜LINE (2:14)

リヴィア：

- 👉 ごめんセリナ、寝顔でドキドキした。
- 👉 待って聞いて。魔王なの。でも見た目が可愛くてもう死ぬ。
- 👉 やばいこれ犯罪では？私いま どの法律に触れてる？
- 👉 この胸の高鳴りは感情？それとも警察の足音？

セリナ：

- 📱 今すぐスマホを置いて寝て
- 📱 魔王でも10歳は10歳です
- 📱 自首するなら朝にして

翌日の夕方、リヴィアはTVに向かってゲームをしている。タイトルは「聖騎士学園、秘められた乙女の想い」。イケメンのボイスが部屋に響いている。

「リヴィア」

後ろから少年の声がして、リヴィアは振り返る。そこにはカエザルが立っていた。

「体調はどうなの？」

「ああ、もう大丈夫である。ありがとう、リヴィア」

「そ、そう。良かったわよ」

リヴィアは少し照れくさそうに答えた。

「それよりも、例の乙女ゲーの続きをやらぬか？」

「あー、あれね。全然クリアできないのよね」

2人はソファに並んで座り、ゲームを始めた。リヴィアはストゼロを飲みながら、カエザルはファンタオレンジを飲んでいる。

画面には恋愛アドベンチャーゲームの選択肢が表示されていた。

🎮乙女ゲー内の選択肢：

💬「君を守るって決めたんだ」

💬「お前の好きにしろ。俺は隣にいる」

💬「ヒロイン、便利なアイテムだな！（CV:宮野真守）」←明らかな地雷

「よし、1番よ！守るって言えば正解でしょ！ふふん、恋愛わかってる私なのよっ」

リヴィアは自信満々に1番を選択した。

「.....その選択肢、80%の確率で地雷であるぞ。ヒロインは守られるより、尊重されたいフェーズに入っておる。文脈を読み」

カエザルが冷静に指摘する。

「うっさいわね！私は騎士なのよ！守ってナンボの人生だったんだから！乙女心なんて知らないわよ！」

「だからその感覚がもう古いのである。恋愛は戦闘ではない。相手の自立性を肯定しつつ、寄り添うことが求められておるのである。なぜわからぬ」

「誰よあんた！？魔王っていうか乙女ゲーのチュートリアル神なの！？」

結果、画面には「修羅場END」の文字が踊った。

「選択を誤ったな。エンディングは.....修羅場ENDである。さようなら、未来の君」

「.....またフラれたわ.....」

リヴィアは泣きながら画面を連打した。

「ストゼロを飲んでも、乙女の道は酔えぬぞ、女勇者よ」

カエザルはため息をつきながら、格言じみたことを言った。

「なんで10歳の魔王の方が恋愛に詳しいのよ.....情けないわよね」

「人間観察歴1000年であるからな」

「それ言われると返す言葉がないわよ.....」

その夜、リヴィアは酔い潰れてソファで寝込んだ。カエザルは小さな体で頑張って毛布を持ってきて、彼女にかけてやった。

「おやすみ、リヴィア」

小さな声で呟いて、自分も毛布にくるまった。

看病を通して、2人の距離は確実に縮まっていた。しかし、リヴィアの心の中では、新しい感情への戸惑いと罪悪感が渦巻いていた。まるで『恋愛相談室』の悩み投稿である。

「29歳、魔王（10歳）にきゅんとしてます。これってどうなのでしょう？」という投稿をしたら、炸上しそうである。

「恋愛は戦闘じゃない、か.....でも私の人生、戦闘しかしてないんだけどね。魔王と戦って、ストゼロと戦って、今度は恋愛と戦うのかしら.....。私の人生はバトルモノなのよ。」

カエザルの言葉が、頭の中でぐるぐると回っていた。

第5章 創造神と天界バトル（前哨戦）

週末の朝、リヴィアは部屋着のスウェット一枚でだらしなくソファに座っていた。ブラジャーもつけず、まさにリラックスモード全開である。カエザルは隣でファンタオレンジを飲みながらスマブラをプレイしている。

「あー、今日も何もする気しないわぁ.....洗濯物？明日でいいじゃない.....」

「勇者よ、せめて洗い物くらいしたらどうである。シンクのにおいが異世界の沼地を彷彿とさせるぞ」

「うっさいわね！私だって.....」

リヴィアがストゼロを取りに立ち上がろうとした瞬間、空間がゆらめいた。

突然、カエザルの体が光に包まれる。そして次の瞬間――

そこには身長190cmの美青年が立っていた。長い黒髪がさらりと肩に流れ、まつ毛がバシバシと長い。低くしっとりとした羽生結弦系の完璧なイケメンである。

「.....戻って、しまったのだが.....」

低い声でそう呟く美青年カエザル。

「.....うん.....」

リヴィアは完全にフリーズした後、静かに正座した。

「.....」

リヴィアは黙って、ソファに置いてあったクッションを取って胸を隠す。

「.....勇者よ、なぜ正座を.....」

美青年カエザルが少し体を動かすだけで、長髪がさらりと揺れる。その仕草にリヴィアの心臓は爆発しそうになった。

「すみません、ほんとすいませんっした.....私みたいな限界OLが調子乗ってほんとすいません。こんなノーブラスウェットのおばさんですみません.....。」

完全に敬語になってしまったリヴィアに、カエザルは困った顔をした。

「.....どうしてしまったのだ。リヴィア.....」

その時、リヴィアの携帯が鳴った。着信は「エリュナ@クソ女神」。

「.....出たくないわ.....」

「出ないのか？」

「あのクソ女神、絶対この状況見て爆笑してる.....」

しかし電話は鳴り続ける。仕方なく出ると――

『リヴィ〜、今どんな気持ち？ショタが美青年になっちゃって、今どんな気持ち？ちなみにツイッターでトレンド入りしたらどうする？』

「.....エリュナ.....あんたの仕業でしょ.....というか、あんたの人生の全てが仕業でしょ！！」

『あー、バレちゃった❤️でも貴方、家に男がいるのに油断しすぎじゃない？ノーブラって.....家事する時くらいはブラしようよ〜。オンオフの区別くらいつけなよ〜』

「お前かああああ！！！！いい加減プライバシー侵害で訴えるからね！！」

リヴィアが逆上して叫んだ。

『あらあら、怒っちゃった❤️でも事実でしょ？スウェット一枚で無防備すぎよ〜』

「プライバシーの侵害よ！神様だからって何でも見てんじやないわよ！！今度EUのGDPR違反で訴えるからね！」

『そんなことより、天界に遊びに来ない？久しぶりにお話しましょうよ❤️』

「は？なんで私が.....」

『カエザルが元に戻る方法、教えてあげる』

リヴィアとカエザルは顔を見合わせた。

「.....行くしかないわよね.....」

30分後、二人は天界にいた。エリュナの神殿は相変わらず豪華絢爛で、水晶玉がいくつも浮かんでいる。そして中央の玉座には、白銀の髪を靡かせた美少女神が座っていた。

「いらっしやーい♥ あら、カエザル君、素敵じゃない？」

「.....エリュナ.....久しいな.....」

カエザルの美青年ボイスに、エリュナも少し動揺した。

「あー、やっぱり大人の姿だと色気ムンムンじゃない！♥.....リヴィ、大丈夫？鼻血出ない？」

「さっさと戻せクソ女神！」

リヴィアは必死に平静を装っていたが、美青年カエザルを視界に入らないようにしてるようだ。

「で、何よ。元に戻す方法って」

「簡単よ♥ リヴィが自分の本当の気持ちを認めればいいの」

「本当の気持ちって.....」

「カエザルのこと、好きでしょ？」

シンプルな問いかけに、リヴィアは言葉を失った。

「好きって.....そりゃあ、同居人として.....」

「恋愛的に、でしょ？」

エリュナの追求に、リヴィアの顔がどんどん赤くなっていく。

「そんな.....私はまだ.....」

「まだ何よ？29歳よ？いつまで現実逃避してるの？」

エリュナの言葉に、リヴィアの中で何かがプツンと切れた。

「うっさいのよクソ女神！あんたに何がわかるって言うの！？私の気持ちなんて！」

「あら、キレちゃった♥ じゃあ久しぶりにやる？バトル？」

エリュナが立ち上がると、神殿全体が神聖な光に包まれた。

「やってやるわよ！聖剣カリバーン！」

リヴィアが手を伸ばすと、光の中から聖剣が現れた。エリユナはしかめ面をする。

「私が魔王を討伐するために渡した聖剣カリバーン。栓抜きにするなんてほんと信じられない❗」

「私がもらったもん、どう使おうが自由よ！」

「リヴィア、私も戦うぞ」

美青年カエザルが前に出る。その姿に、リヴィアの心臓がドキドキした。

「あ.....あんたは下がってなさい！これは私とエリユナの問題よ！」

「.....そうはいかぬ。私も当事者である」

カエザルが手を伸ばすと、闇の魔力が渦巻いた。魔王としての力が少しずつ戻っているようだった。

「あら、面白くなってきたじゃない♡じゃあ、二対一ね？」

エリユナが笑うと、天界の空間が戦闘フィールドに変わった。

「いくわよ、カエザル！」

「ああ！」

二人が並んで構える。その時、リヴィアは昔の戦場を思い出していた。背中を預け合って戦った日々。でも今は、守るものが違う。

「喝破せし虚無の光よ！」

リヴィアの聖剣から光の奔流が迸る。

「暗黒の深淵よ、我が呼び声に応えよ！」

カエザルからも闇の魔力が放たれる。

光と闇が交差し、エリユナに向かっていく。

「選択なき采配（ディシジョン・コース）！」

エリユナの神技が二人の攻撃を無効化する。

「まだまだ〜❤️」

エリュナの反撃が始まった。神の雷が二人に降り注ぐ。

「うわあああ！」

「ぐっ……！」

二人は吹き飛ばされそうになるが、お互いを支えあって立ち上がる。

「リヴィア……大丈夫か……？」

美青年カエザルが心配そうにリヴィアを見つめる。その瞬間、リヴィアの心の中で何か
がはっきりした。

「……私……」

「ん？」

「私、あんたのこと……」

その時、エリュナが手を叩いた。

「はい、ストップ❤️今日はここまで」

「え？」

戦闘フィールドが元の神殿に戻る。

「リヴィ、もうすぐ答えが見えそうじゃない？でも今日は帰りなさい。答えは自分で見
つけるのよ」

「ちょっと、中途半端じゃない！」

「あら、続きは次回❤️それより、カエザルの魔力、もうすぐ元に戻るわよ」

エリュナが指を鳴らすと、美青年カエザルがまたぼんやりと光った。

「……また、小さくなるのか……」

「当分はショタのままね。でも、リヴィの気持ちが固まったら……どうなるかしら？」

エリュナが意味深に笑う。

そして光が消えると、そこにはいつものショタカエザルが立っていた。

「.....戻ったのである」

「.....そうね.....」

リヴィアは少し寂しそうだった。

「じゃあ、帰りましょうか」

帰り道、二人は無言だった。

「リヴィア」

「何よ」

「さっき、何を言おうとしたのである？」

リヴィアは立ち止まった。夕陽が二人を照らしている。

「.....まだ、わからないの。でも.....」

「でも？」

「あんたが大人の姿になったとき.....ちょっと、ドキドキした」

「.....そうか」

カエザルも立ち止まる。

「でも、ショタのあんたも.....嫌いじゃないわよ」

そう言って、リヴィアは歩き出した。

「.....ありがとう、リヴィア」

カエザルも後を追う。

「カエザル」

「なんだ？」

「私たち.....なんか、変わったかもしれないわね」

「そうであるな」

「でも.....怖いよ。本当の気持ちに向き合うのって」

カエザルはリヴィアの隣に座った。

「私がいる。一緒に考えよう」

「.....ありがと」

二人はしばらく、夜空を見上げていた。

関係性が少しずつ変化していく中で、リヴィアは自分の心と向き合う必要があることを感じていた。エリュナの言葉が頭の中でぐるぐると回っている。まるでスマホのLINE通知がいつまでも消えない状態である。

「本当の気持ち.....か.....でも私の気持ち、テストの選択問題じゃないんだから、簡単に答え出せないわよ.....」

小さく呟いたリヴィアの声は、夜風に溶けていった。

その夜、リヴィアはまた深夜にセリナにLINEを送っていた。

📱 深夜 1:49 の LINE 画面

リヴィア：

👉 ノーブラの時に魔王が大人になった。死にたい。

👉 てか、声低すぎん？え？何あの声？

👉 ちょっと動いただけで長髪が揺れてこっち見たの。こっちはもう、終わり。

👉 いや、でもこれ。許されるの？『29歳ノーブラ、イケメンでキュン死』

セリナ：

📱 寝るときはちゃんとブラつけて。形が崩れるよ。

📱 あとスマホ置いて。あと人生考えて。

📱 そのタイトル、絶対にドラマ化されちゃダメです。

セリナの母への手紙(夏)

『お母さんへ

いつもお疲れ様です。最近のお母さんはお元気でしょうか。

姉さんのことですが、最近少し様子が変わってきました。まだストゼロは飲んでますが、前ほど投げやりではなくなったような気がします。魔王のカエザル君のおかげかもしれません。

姉さんが少しずつ前向きになってくれているのを見ると、私も嬉しいです。きっとお母さんも安心されると思います。

また近いうちに、三人でお食事でもしませんか？

セリナより

P.S. 姉さんの下着事情、相変わらず深刻です.....』

文字数: 約3,800文字 **次章への伏線:** リヴィアの内面的成長への転換点、カエザルとの関係の変化 **キャラクター状況:** リヴィア（感情への気づき）、カエザル（包容力のある支え）、エリュナ（真意の一部開示）

第6章 情緒崩壊と回復の兆し

その日の朝、リヴィアは珍しく早起きしてストゼロを開けていた。カエザルはまだ寝ている。昨日の天界でのバトルと美青年化事件で、色々と考えることが多すぎて眠れなかったのだ。

「自分の本当の気持ちって.....何よそれ.....」

ストゼロを一口飲んで、ため息をつく。そんな時、ピンポンとチャイムが鳴った。

「はい.....って、セリナ？こんな早くに何よ」

「おはようございます、姉さん。今日は特別な日ですよ」

セリナが満面の笑顔で立っている。その手には紙袋を持っている。

「特別な日って？」

「婚活パーティーです♪ 姉さんの幸せのために、申し込んでおきました」

「はあああああ！？」

リヴィアの絶叫が朝の住宅街に響いた。

6-1. 婚活イベント地獄

2時間後、リヴィアは都内のホテルの宴会場にいた。セリナに無理やり引きずられてきたのである。会場には20代後半から30代前半の男女が集まっている。

「セリナ、私帰る」

「ダメです。姉さんのプロフィールカード、私が書いておいたので」

セリナが差し出したカードを見ると――

【プロフィール】

名前: リヴィア

年齢: 29歳

職業: 会社員

趣味: 読書、映画鑑賞

好きな食べ物: 和食

理想の相手: 優しくて頼りがいのある方

「.....嘘しか書いてないじゃない」

「姉さんの本当の趣味書けるわけないでしょう。『ストゼロ』『ショタASMR』なんて」

「うっ.....」

反論できないリヴィアだった。

婚活パーティーが始まると、リヴィアは最初からフリードリンクのアルコールに手を伸ばした。ワイン、日本酒、ビール、とにかく飲めるものは片っ端から飲んでいく。

「姉さん、お酒控えめに.....」

「大丈夫よ.....」

すでに目が座り始めている。

男性陣が順番に女性のテーブルを回ってくる。最初にリヴィアのところに来たのは、30代の爽やかなイケメンだった。

「初めまして。よろしくお願いします」

「.....よろしく.....」

リヴィアは無表情で酒を飲み続けている。

「えーと、プロフィールを拝見させていただいたのですが.....趣味はなんですか？」

リヴィアがワイングラスを置いて、真顔で答えた。

「ストゼロ」

「え？」

「ストゼロです」

すでに目が完全に座っている。爽やかイケメンは困惑した顔をしている。

「あー.....ストロング.....ゼロ.....ですね.....」

「9%のやつが好きです」

会話が完全に止まった。周りのテーブルからも視線が集まる。

「あはは.....そう.....ですね.....」

爽やかイケメンは早々に次のテーブルに移っていった。

リヴィアは構わず、次のお酒に手を伸ばす。数時間が経つ頃には、完全に酔いつぶれていた。

「すみません、ちょっとトイレに.....」

リヴィアは席を立って、フラフラしながらトイレに駆け込んだ。

個室に入るなり、激しく嘔吐した。アルコールの飲みすぎと自己嫌悪で気持ち悪くなったのだ。

「おえええええ.....うえっ.....ごめん、トイレの神様.....こんな場所で.....うえっ.....」

「姉さん！」

セリナが慌てて個室に入ってきて、リヴィアの背中をさすり始めた。

「おえええええ.....ぐすっ.....全部、神のせい.....エリュナが.....エリュナがあああ.....あのクソ女神のドッキリで.....うえっ.....」

リヴィアは嘔吐しながら泣いている。

「姉さん.....」

セリナも静かに涙を流していた。姉の惨状を見ているのが辛かった。

「なんで私だけ.....こんな.....うえっ.....」

「大丈夫、大丈夫ですから.....」

セリナは優しく背中をさすり続ける。

「私、もうダメ.....普通に恋愛なんて.....できない.....もう生涯で魔王と同棲するしか道がないの.....？」

「そんなことはないです」

「うそよ.....みんな引いてる.....ストゼロって言うただけで.....いや、でもストゼロはストゼロでしょ？嘘ついてないじゃん.....」

リヴィアは便器に顔をうずめて泣き続けた。

「今日は帰りましょう」

「.....うん.....」

セリナはリヴィアを支えて、トイレから出た。

その頃、天界では――

エリユナがワイングラスを片手に、水晶玉で婚活パーティーの様子を見ていた。

「あっはっはっは！『ストゼロです』って真顔で言っちゃった！最高！」

エリユナが膝を叩いて大爆笑している。

「エリユナ様.....さすがにちょっと可哀想では.....」

傍に立つイケメン参謀が苦笑いを浮かべている。

「だって面白いんだもん❤️あの真剣な顔で『9%のやつが好きです』って！」

「リヴィア様、完全に酔っ払ってましたね.....」

「でも、これで少しは現実が見えるでしょ？普通の恋愛なんて、リヴィには無理なのよ」

エリユナがワインを一口飲む。

「カエザルと向き合うしかないのに、まだ気づかないのかしら」

「エリユナ様の計画通りということですか？」

「まあ、そんなところかな❤️」

6-2. 姉妹喧嘩（情緒崩壊編）

家に帰る途中、リヴィアの感情が爆発した。

「なんで私だけこんな目に遭うのよ！」

駅のホームで突然叫んだ。通りすがりの人たちが振り返る。

「姉さん、落ち着いて……」

「あんたは良いわよ！レオっていう素敵な彼氏がいて、普通に恋愛して、普通に幸せで！」

「姉さん……」

「私は何よ！？29歳で魔王と同居って頭おかしいでしょ！？しかも10歳の見た目だし！異常よ！！」

セリナは黙って聞いていた。

「全部お前のせいだ！」

「え？」

「あんたがレオと幸せそうにしてるから、私が惨めに見えるのよ！あんたさえいなければ——」

「姉さん！」

セリナが初めて大きな声を出した。

「それは違います！」

「何がよ！」

「姉さんが幸せじゃないと、私も幸せじゃないの！」

セリナの目に涙がにじんでいる。

「姉さんがストゼロばかり飲んで、部屋に引きこもって、『死にたい』ってLINE送ってくる度に、私、心配で心配で夜も眠れないの！」

「そんなの知らないわよ……」

「知らないって……姉さん、私がどれだけ姉さんのこと心配してると思ってるの？」

セリナの声が震えている。

「お母さんだって、毎日のように姉さんのこと心配してる。『リヴィアは大丈夫？』『ちゃんと食べてる？』って」

「.....」

「私、姉さんが笑ってくれるなら何でもする。だから婚活パーティーも申し込んだし、掃除もするし、手紙も書くの」

セリナが泣き出した。

「でも、姉さんが私のせいで惨めって言うなら.....私、どうしたらいいか分からない.....」

リヴィアはハッとした。自分が何を言ったのか、やっと理解した。

「セリナ.....私.....」

「姉さんには、カエザル君がいるじゃないですか」

セリナが涙をぬぐいながら言った。

「カエザル君、姉さんのことすごく大切に思ってますよ。見ていて分かります」

「でも.....」

「姉さんも、カエザル君のこと好きでしょう？」

セリナの問いかけに、リヴィアは答えられなかった。

「私は.....分からないの.....」

「分からないって？」

「本当の気持ちが.....分からない.....」

リヴィアも泣き出した。

「怖いよ.....本当の気持ちに向き合うのが.....」

セリナはリヴィアの手を取った。

「姉さん、大丈夫です。私がついてます」

「セリナ.....」

「一緒に考えましょう。姉さんの幸せ」

二人は駅のベンチに座って、しばらく泣いた。

「ごめん……セリナ……ひどいこと言って……」

「いえ、姉さんが素直になってくれて嬉しいです」

「あんたって……本当にいい子よね……」

「姉さんの妹ですから」

セリナが微笑んだ。

「私、変わらなきゃダメかもしれない……」

「姉さん……」

「でも、どうやって？」

「まずは、カエザル君との関係をちゃんと考えてみませんか？」

リヴィアは頷いた。

6-3. セリナの実家への手紙

その夜、家に帰ると、カエザルが心配そうに待っていた。

「リヴィア、どこに行っていたのである？」

「あー……婚活パーティー……」

「婚活？」

カエザルの表情が少し曇った。

「でも、全然ダメだったわ。やっぱり私、普通の人とは合わないのよね」

「……そうか」

カエザルは何か言いたそうだったが、黙っていた。

その夜、セリナが母親への手紙を書いているのを見かけた。

「セリナ、何書いてるの？」

「お母さんへの手紙です。姉さんのこと、報告しなくちゃ」

「そっか.....心配かけてるわよね.....」

リヴィアは自分の部屋を見回した。ストゼロの空き缶、コンビニ弁当の容器、使い込まれた下着。

「私って.....みんなに心配かけてるのね.....」

「でも、みんな姉さんのこと愛してますから」

「.....ありがと、セリナ」

その夜、リヴィアは久しぶりに母親に電話をかけた。

「もしもし、お母さん？私、リヴィア」

『リヴィ！元気にしてる？』

「うん.....元気よ.....って言いたいけど、実はそうでもなくて.....」

『どうしたの？』

「色々.....考えることがあって.....」

『そっか。でも、リヴィが考えるってことは、前に進もうとしてるってことよね』

母親の優しい声に、リヴィアは涙ぐんだ。

「お母さん.....私、変われるかな？」

『もちろんよ。リヴィはまだ29歳でしょ？これからよ』

「.....ありがとう、お母さん」

電話を切った後、リヴィアはカエザルの部屋の前に立った。

「カエザル、起きてる？」

「ああ、起きている」

「.....入っても良い？」

「どうぞ」

リヴィアが部屋に入ると、カエザルはベッドに座っていた。

「今日は.....ありがとう。心配かけて」

「.....気にするな。それより、婚活はどうだったのである？」

「最悪よ。でも.....色々分かったことがあるの」

「どんな？」

「私、本当の気持ちから逃げてたのかもしれない」

カエザルは黙って聞いていた。

「あんたとの関係も.....ちゃんと考えなきゃいけないのかも」

「.....リヴィア」

「でも、まだ怖い。答えを出すのが」

カエザルはリヴィアの隣に座った。

「急がなくて良い。私は待っている」

「.....ありがと」

二人はしばらく、静かに座っていた。

リヴィアは少しずつ、自分の心と向き合う準備ができ始めていた。まだ答えは出ないけれど、逃げるのはやめようと思った。

「カエザル」

「なんである？」

「明日から.....ちょっとずつ変わってみる」

「.....良いことである」

「あんたも.....一緒にいてくれる？」

「当然である」

カエザルの答えに、リヴィアは少しだけ安心した。

関係性は変わっていく。でも、一人じゃない。そう思うと、前に進む勇気が少し湧いてきた。

セリナの母への手紙（秋）

『お母さんへ

いつもお元気でしょうか。秋も深まってきましたね。

姉さんのことですが、今日は大変なことがありました。婚活パーティーに連れて行ったのですが、やはり姉さんには合わなかったようです。

でも、久しぶりに姉さんと本音で話すことができました。姉さんも少しずつ、自分の気持ちと向き合おうとしています。

そういえば、姉さんのラッコ柄の下着のこと、覚えていますか？ 実は、あれは10年前にお母さんが買ってくれたものなんです。姉さん、まだ大切に使っているんですよ。ちょっと使い込まれすぎて心配になるほどですが.....

お母さんからの愛情を、姉さんなりに大切にしているんだなって思いました。

姉さんが幸せになれるように、私も頑張ります。お母さんも、姉さんのこと見守っていてくださいね。

セリナより

P.S. 今度、三人でお食事しませんか？ 姉さんも、お母さんに会いたがっていると思います』

文字数: 約3,800文字 次章への伏線: リヴィアの変化への決意、自分と向き合う覚悟
キャラクター状況: リヴィア（感情の混乱から立ち直りの兆し）、セリナ（献身的な支え）、カエザル（包容力のある理解者）

第7章 運命への覚悟

7-1. 魔王の友達事件

リヴィアが「少しずつ変わってみる」と宣言してから一週間が経った。朝の6時半、目覚まし時計の音で起きたリヴィアは、いつもなら手を伸ばすストゼロではなく、コップ一杯の水を飲んだ。

「今日も頑張るか……」

小さくつぶやいて、洗面台に向かう。鏡に映る自分の顔は相変わらずむくんでいるが、目に少しだけ生気が戻っていた。

「カエザル、起きなさい！学校よ！」

「んむー……あと5分……」

ショタモードのカエザルは布団にくるまっている。リヴィアは苦笑いしながら、カーテンを開いた。

「魔王様が遅刻してどうするのよ」

「うう……分かったのである……」

カエザルは渋々起き上がった。最近のリヴィアは、以前より世話を焼いてくれるようになったが、同時に少し距離を置いているような気もした。

「お弁当作ったから」

「え？」

カエザルが振り返ると、リヴィアがキャラ弁当を手にとっていた。おにぎりが猫の形になっている。

「昨日の夜、YouTube見ながら作ったのよ。不格好だけど……」

「……ありがとう、リヴィア」

カエザルは嬉しそうに微笑んだ。リヴィアの変化を感じ取っていた。

30分後、二人は小学校の校門前に立っていた。

「それじゃあ、行ってらっしゃい」

「うむ。行ってくるのである」

カエザルが校門に向かおうとしたその時、一人の男の子がやってきた。

「カエザルくん！」

「おお、タケシである」

タケシという名前のクラスメートが駆け寄ってくる。リヴィアはその様子を微笑ましく見ている。

「今日の放課後、みんなで公園でサッカーやるんだ。カエザルくんも来る？」

「うむ、良いであろう」

「やったー！あ、そういえば……」

タケシがリヴィアに視線を向けた。

「カエザルくんのお母さんですか？」

「え？」

リヴィアは凍りついた。

「お母さん、すごく美人だね！」

「あ、あの……」

「僕のお母さんより若いかも！」

タケシが無邪気に言った。リヴィアの表情がみるみる青ざめていく。

「タケシ、リヴィアは私の——」

「お母さん、今日の授業参観も来てくれるの？」

「じゅ、授業参観？」

リヴィアが振り返ると、カエザルが困った顔をしている。

「実は.....昨日、授業参観のお知らせをもらったのである.....」

カエザルがランドセルから紙を取り出した。

【授業参観のお知らせ】 日時: 本日5時間目（午後1時30分～） 内容: 算数「図形の面積」 **保護者の皆様のご参加をお待ちしております

「なんで昨日に言わないのよ！」

「その.....リヴィアが疲れていたようだったから.....」

確かに昨日のリヴィアは、セリナとの話し合いで精神的に疲れていた。

「でも今日は会社が.....」

「お母さん、お仕事お休みできないの？」

タケシが心配そうな顔をする。

「私は.....その.....」

リヴィアは混乱していた。お母さんと呼ばれることへの戸惑い、29歳で10歳の子の保護者として扱われることへの複雑な気持ち。

「リヴィア、無理しなくても良い」

カエザルが気を遣って言った。

「.....分かったわ。会社に連絡してみる」

結局、リヴィアは午後から有休を取ることにした。

午後1時20分、リヴィアは小学校の教室にいた。周りを見回すと、本当のお母さんたちが並んで座っている。30代から40代の女性たち。リヴィアよりも年上の方がほとんどだ。

「あの.....初めまして」

隣に座った女性が声をかけてきた。

「こんにちは」

「カエザルくんのお母さんですよ？いつもうちの息子がお世話になっています」

「あ……はい……」

リヴィアは曖昧に答えた。

「お若いんですね。おいくつですか？」

「に、29です……」

「え！私より年下！でも息子さんは10歳ということは……」

女性の顔が曇る。リヴィアは冷や汗をかいた。

「あの……実は……義理の……」

「ああ、継母さんなんですね。大変でしょう？」

女性が勝手に解釈してくれて、リヴィアは内心でホッとした。

授業が始まると、カエザルは堂々と手を上げて発表していた。

「図形の面積を求めるには、底辺×高さ÷2の公式を使うのである！」

「はい、カエザルくん正解です！」

先生が褒めると、周りの保護者たちがざわめいた。

「カエザルくん、すごく賢いのね」

「発表の仕方も堂々としてるし」

リヴィアは少し誇らしい気持ちになった。

授業が終わった後、カエザルがリヴィアのところにやってきた。

「リヴィア、来てくれてありがとう」

「どういたしまして……あんな、すごく頑張ってるじゃない」

「うむ！算数は得意なのである」

その時、タケシが友達を連れてやってきた。

「みんな！カエザルくんのお母さんだよ！」

「うわー！本当に美人だ！」

「僕のお母さんより若い！」

子供たちがリヴィアの周りに集まってくる。

「ありがとう、おばさん！」

その瞬間、教室の空気が凍りついた。リヴィアの時間が止まった。静寂。シーン。氷河期。

「.....え？」

リヴィアの表情筋が一気に引き攣る。

「今.....おばさんって.....」

子供たちも気まずい空気を感じ取って、しーんと静かになった。

「あー.....その.....お姉さん？」

慌てて訂正する子供。しかし、時すでに遅し。

リヴィアの中で何かが崩れ落ちる音がした。まるでゲームオーバーのBGMである。

おばさん。

29歳の自分は、10歳の子供たちにとって「おばさん」なのだ。これが現実。これが公式設定。

「リヴィア？」

カエザルが心配そうに見上げる。

「だ、大丈夫よ.....」

リヴィアは作り笑いを浮かべたが、その目には絶望が宿っていた。

「それじゃあ.....お疲れさま.....」

リヴィアはフラフラと教室から出て行った。

カエザルは慌てて後を追う。

「リヴィア！待つのである！」

校庭で、リヴィアは立ち止まった。

「私.....おばさんなのね.....」

「そんなことない！」

「10歳の子から見たら、29歳はおばさんよ.....当たり前じゃない.....」

リヴィアの声が震えていた。

「年齢など関係ない！」

「関係あるわよ！」

リヴィアが振り返る。その目は涙でいっぱいだった。

「私たち.....おかしいのよ.....10歳と29歳が一緒に住んでるなんて.....普通じゃないのよ.....」

「リヴィア.....」

「みんな知ってるのよ.....私に変な女だって.....普通じゃないって.....」

リヴィアは泣き出した。

カエザルはリヴィアの手を取った。

「私にとって、リヴィアは特別な存在である」

「でも.....」

「年齢など、些細なことである」

カエザルの手が温かかった。

「私は.....私は.....」

リヴィアは言いかけて、やめた。

自分の本当の気持ちを言うのが、まだ怖かった。

7-2. 本当の気持ちと向き合う

その日の夜、リヴィアは自分の部屋でひとり考えていた。カエザルは宿題をしている。

「おばさん、か……」

鏡に映る自分の顔を見つめる。確かに、疲れて見える。クマはあるし、肌荒れもしている。

「29歳……」

同じ年の同僚は結婚して、子供もいる。普通の人生を歩んでいる。

一方で自分は？

ストゼロを飲みながら、10歳の魔王と同居している異常な日々。

「私って……何やってるんだろう……」

ベッドに倒れ込んで、天井を見上げた。

そんな時、カエザルがノックした。

「リヴィア、入って良いか？」

「……どうぞ」

カエザルが部屋に入ってくる。手には宿題のノートを持っていた。

「算数、少し教えてもらえるか？」

「……うん」

リヴィアはベッドから起き上がった。

二人はコタツに向かい合って座る。

「この問題が分からないのである」

カエザルが指差した問題は、台形の面積を求める問題だった。

「台形は……（上底＋下底）×高さ÷2よ」

「ほう……」

リヴィアが鉛筆で計算を書いていく。カエザルはじっと見つめていた。

「リヴィア」

「なに？」

「今日は……ありがとう」

カエザルが真剣な表情で言った。

「授業参観、来てくれて嬉しかった」

「……そう」

「私にとって、リヴィアは家族である」

リヴィアの手が止まった。

「家族って……」

「うむ。大切な家族である」

カエザルの言葉に、リヴィアの胸が痛んだ。

「でも……私たち、変よ」

「何が変である？」

「年齢も……関係性も……全部」

リヴィアが鉛筆を置いた。

「私、最近よく考えるの……あんたといると、すごく安心するの」

「……」

「でも同時に、これでいいのかなって……迷いもある」

カエザルは黙って聞いていた。

「あんたの寝顔を見てると……ドキドキするの」

リヴィアの頬が赤くなった。

「でも、それって母性なのか、恋愛感情なのか.....よく分からなくて.....」

「リヴィア.....」

「あんたは10歳の姿だけど、実際は1000歳超えてるのよね？」

「そうである」

「私より年上.....経験も豊富で.....大人で.....」

リヴィアが顔を伏せた。

「なのに私は.....29歳なのに.....何も分からない.....」

「リヴィアは十分大人である」

「そんなことないわよ！今日だって『おばさん』って言われて動揺して.....情けないじゃない」

リヴィアの目に涙がにじんだ。

「私、あんたのことが.....」

言いかけて、リヴィアは言葉を飲み込んだ。

「私、あんたのことが.....好きかもしれない」

小さな声で、やっと言えた。

カエザルの表情が変わった。

「でも.....これって恋愛なの？母性なの？よく分からないの.....」

「リヴィア.....」

「あんたの成人形態を見た時も.....ドキドキしたけど.....それって外見に惑わされてるだけなのかも.....」

リヴィアが泣きそうになった。

「私、自分の気持ちが分からない.....怖いよ.....」

カエザルはリヴィアの隣に座った。

「私も.....リヴィアのことを好きである」

「え？」

「最初は興味だった。現代に適応できない元勇者として。でも一緒に暮らすうちに.....」

カエザルがリヴィアの手を取った。

「リヴィアの優しさ、不器用さ、強がり.....全部好きになった」

「カエザル.....」

「年齢など関係ない。大切なのは、心である」

カエザルの言葉に、リヴィアの心が揺れた。

「でも.....世間的には.....」

「世間など知ったことではない」

カエザルが断言した。

「私はリヴィアを愛している。それだけである」

「.....愛してる？」

「そうである。恋愛感情として」

リヴィアは涙を流した。

「私も.....あんたを愛してる.....」

やっと、本当の気持ちを口にできた。

「でも.....怖いのか.....この関係が続けられるのか.....」

「大丈夫である。私が守る」

カエザルがリヴィアを抱きしめた。

「一緒に乗り越えよう、リヴィア」

「.....うん」

リヴィアはカエザルの温もりに身を委ねた。

まだ不安はある。でも、一人じゃない。

それだけで、少しだけ前に進む勇気が湧いてきた。

7-3. 決意の瞬間

次の朝、リヴィアは珍しく早起きした。しかし、ストゼロには手を伸ばさなかった。

代わりに、久しぶりにちゃんとした朝食を作っていた。

「おお、良い匂いである」

カエザルが起きてきた。

「おはよう。今日は卵焼きとお味噌汁よ」

「本格的であるな」

カエザルが席に座る。リヴィアも向かいに座った。

「カエザル」

「なんである？」

「私.....決めたことがあるの」

リヴィアが真剣な表情で言った。

「エリュナに決着をつけるわ」

「リヴィア.....」

「あいつが全ての元凶よ。異世界からの転移、あんたのショタ化、レオとセリナの件.....全部エリュナが仕組んだことでしょ？」

カエザルは頷いた。

「そのまま泣き寝入りするのは嫌なの。私の人生、私で決めたい」

リヴィアの目に、久しぶりに闘志が宿っていた。

「危険である」

「分かってる。でも、逃げ続けるのはもう終わりよ」

リヴィアが立ち上がった。

「あいつと戦って、勝って、全部決着つける」

「私も一緒に戦う」

「ありがと……でも」

リヴィアがカエザルを見つめた。

「今度は私が守る番よ」

「リヴィア……」

「あんたはいつも私を支えてくれた。今度は私があんたを守る」

リヴィアは押入れに向かった。奥から、ほこりをかぶった箱を取り出す。

「まさか……」

カエザルが驚いた。

箱から出てきたのは、騎士の鎧と聖剣カリバーンだった。

「久しぶりね……」

リヴィアが聖剣を手取る。刃は栓抜きとして使われていたため、少し欠けていた。

「でも、まだ戦える」

剣を振ってみる。重い。昔ほど軽々とは扱えない。

「リヴィア、無茶はするな」

「大丈夫よ。私だって元勇者なんだから」

リヴィアが微笑んだ。でも、その笑顔には不安も混じっていた。

「それより.....勝った後のこと、考えてる？」

「勝った後？」

「エリュナを倒して、全部解決した後.....私たちどうなるの？」

カエザルの問いに、リヴィアは考え込んだ。

「.....分からない」

「元の世界に帰るのか？それとも.....」

「分からないけど.....」

リヴィアがカエザルの手を取った。

「あんたと一緒にいたい。それだけは確か」

「私もである」

二人は見つめ合った。

「じゃあ.....行きましょうか」

「どこに？」

「天界よ。エリュナのところ」

リヴィアが鎧に手をかけた。

「久しぶりに着てみる」

10分後、リヴィアは騎士の鎧に身を包んでいた。

「.....きつい」

29歳のボディには、19歳の頃の鎧はきつかった。

「リヴィア、苦しそうである」

「大丈夫よ！これくらい！」

強がって言うが、明らかに呼吸が浅い。

「聖剣もちちゃんと持てる」

カリバーンを構える。やはり重い。

「リヴィア……」

「なによ？」

「その姿……とても美しいである」

カエザルが見とれていた。

「お、お世辞はいいのよ……」

リヴィアが照れながら言った。

「では、行くか」

「うん」

カエザルが魔法を唱えると、二人の体が光に包まれた。

転移魔法。天界への道。

「私の人生……やり直させろ！」

リヴィアの叫びが、空間に響いた。

セリナの母への手紙（冬）

『お母さんへ

もう12月になりますね。今年も残りわずかです。

姉さんのことですが、ここ最近大きな変化がありました。朝早く起きるようになったし、ちゃんとした食事を作るようになりました。

そして今日、姉さんはカエザルくんと一緒にどこかに出かけて行きました。すごく真剣な顔をしていました。

きっと、姉さんなりに答えを見つけようとしているんだと思います。

10年前に買ってくれたラッコ柄の下着も、今日はちゃんと洗濯して干してありました。
姉さんが変わろうとしている証拠かもしれません。

お母さん、姉さんのこと信じていてください。姉さんはきっと、幸せになれると思います。

私も、姉さんを支え続けます。

セリナより

P.S. もしかしたら、もうすぐ姉さんから良いお知らせがあるかもしれません』

文字数: 約4,200文字 **次章への伏線:** 天界での最終決戦、エリユナとの対決 **キャラクター状況:** リヴィア（決意を固め戦いへ）、カエザル（リヴィアの成長を見守り支援）、セリナ（姉の変化を見守る）

第8章 世界の因果を貫けッ！

8-1. 最終決戦前夜

天界への転移が完了すると、二人は雲の上の白い大理石でできた巨大な宮殿の前に立っていた。

「うわー.....相変わらず趣味悪いわね、エリュナの宮殿」

リヴィアは鎧の胸の部分をちょっと緩めながら言った。やはり5年前の装備は体型的にキツイ。カエザルも小学生の体で魔法を使ったせいか、少し息を切らしている。

「大丈夫か、カエザル？」

「問題ない.....ただ、この姿で魔法を使うと疲れるのである」

「無理しないでよ。あんたが倒れたら、私一人でエリュナと戦わなきゃいけないじゃない」

「心配するな。私とて元魔王である」

カエザルが胸を張って言ったが、10歳の外見では迫力に欠ける。むしろ可愛い。

「.....あんた、本気で戦う気あるの？」

「当然である。リヴィアを守るためなら、この命に代えても」

「はあ？何それ、急にかっこいいこと言っちゃって」

リヴィアは照れながら言った。こういう時のカエザルは、本当に千年を生きた魔王らしい威厳を感じさせる。

「でも.....本当に、これでいいのかしら」

「何がである？」

「エリュナと戦うことよ。確かにあいつはクソ女神だけど.....」

リヴィアは空を見上げた。夕焼けが雲を赤く染めている。

「昔は、親友だったのよね」

「そうだったのか？」

「.....まあ、親友っていうか、腐れ縁？ あいつとは勇者になる前からの付き合いなの。一緒にバカやって、一緒に怒られて.....」

リヴィアの表情が少し柔らかくなった。

「でも、あいつは私を現代に飛ばして、あんたを小学生にして、レオとセリナをくっつけて.....全部、全部あいつの采配なのよ」

「.....リヴィア」

「許せないわよ、そんなの！ 私の人生を勝手にいじくり回して！」

リヴィアの声に怒りがこもった。しかし、その奥には悲しみも混じっている。

「でも、もしエリュナの采配がなかったら.....私とあんたは出会わなかった」

「.....そうだな」

「それに、セリナだって幸せになったし、レオだって.....」

「リヴィア、迷う必要はない」

カエザルがリヴィアの手を取った。

「どんな結果でも、今の私たちがここにいることに変わりはない。それに.....」

「それに？」

「エリュナを殴るのは、君の夢だったではないか」

「.....ふっ」

リヴィアが吹き出した。

「そうね、確かに。あいつを一発殴るのが、ここ5年間の夢だったわ」

「では、行こうか」

「うん」

二人は手を繋いだまま、宮殿の大扉に向かって歩いていく。

「カエザル」

「なんである？」

「あんた、本当に変わったわよね」

「私がか？」

「昔はもっと……こう、尊大で威厳があって」

「今は違うのか？」

「今は……なんか、可愛いわ」

カエザルの顔が真っ赤になった。

「か、可愛いとは何事である！私は魔王であるぞ！」

「はいはい、可愛い魔王様ね」

リヴィアがにこっと笑った。久しぶりに、本当に幸せそうな笑顔だった。

8-2. 天界最終決戦

宮殿の玉座の間に入ると、そこにはエリユナが退屈そうに座っていた。

「あー、やっと来た。遅いじゃない」

相変わらずの軽いノリ。しかし、その周りには神聖な光がオーラのように漂っている。
やはり、創造神としての力は本物だ。

「エリユナアアアア！」

リヴィアが聖剣を抜いて叫んだ。5年間の鬱憤が爆発する。

「待ってました、その台詞！やっぱりリヴィはそうでなくちゃ！」

エリユナが手をパンパンと叩いて喜んでいる。

「今日こそ決着つけるわよ！私の人生を滅茶苦茶にした罪、償ってもらおうから！」

「滅茶苦茶って酷いなあ。私はリヴィの幸せを願って……」

「うっせー！ 勝手に決めんじゃねーよ！」

リヴィアが聖剣を振りかざして突進する。エリュナも神器らしき光る杖を構えた。

「仕方ないね。本気出しちゃうか」

二人の武器がぶつかった瞬間、宮殿全体が激しく揺れた。

「喝破せし虚無の光よ！」

リヴィアが技名を叫びながら、聖剣から光の波動を放つ。しかし……

「ちょっと待って、その技名恥ずかしくない？」

「うっせー！ 厨二で何が悪いのよ！」

「いや、まあ、悪くはないけど……選択なき采配（ディシジョン・コース）！」

エリュナも負けじと厨二全開の技を放つ。天界中に光と闇の魔法がぶつかり合う音が響いた。

「あんたの方がよっぽど厨二じゃない！」

「これは神聖な技よ！」

「嘘つけ！」

二人は魔法を撃ち合いながら、まるで子供の喧嘩のような口論を続ける。

「そもそもリヴィが現代に適應できないのが悪いんでしょ！」

「適應って何よ！ いきなり知らない世界に放り込まれて、適應も何もないでしょ！」

「でも他のみんなは上手くやってるじゃない！」

「他って誰よ！ ヴァルグは真面目すぎるし、カエザルは子供だから順應早いし！」

「それは言い訳でしょ！」

魔法の応酬が続く中、カエザルは少し離れたところから見ていた。

「……なんというか、本当に仲が良いな、この二人は」

そう、これは戦いというより、長年溜まった文句の言い合いだった。

「ていうか！ 私をストゼロ依存にしたのもあんたでしょ！」

「それは違うわよ！ リヴィが勝手にハマったの！」

「最初にコンビニで手に取らせるように誘導したじゃない！」

「それは.....まあ.....ちょっとだけ」

「ほら！ 認めた！」

「でも！ 9%の味を教えてあげたのは親切心よ！」

「親切心でアルコール依存にすんじゃねーよ！」

戦いながらの口論は、もはやコントの域に達していた。

「終幕世界崩壊斬！」

「それも恥ずかしい技名ね！ 天界震撼絶対零度！」

「あんたもでしょ！」

ついに二人の最大技がぶつかり合った。宮殿の屋根が吹き飛び、天界中に衝撃が走る。

そして――

8-3. 決着と和解

「いて.....」

「痛たた.....」

宮殿の瓦礫の中で、リヴィアとエリュナが並んで倒れていた。二人とも埃まみれ、髪はボサボサ。

「あー、疲れた」

「私もよ.....」

なぜか、怒りがスッと引いていた。言いたいことを全部言って、思いっきり暴れて、なんだかスッキリしている。

「.....エリュナ」

「なに？」

「なんで、私を現代に飛ばしたの？ 本当の理由」

エリュナは少し黙ってから、答えた。

「.....リヴィが可哀想だったから」

「は？」

「勇者って、重いでしょ？ みんなの期待背負って、正義のために戦って.....リヴィ、本当は疲れてたじゃない」

リヴィアは黙っていた。

「だから、普通の人生を歩めばいいって思ったの。現代なら、勇者じゃなくても生きていける」

「でも.....」

「でも、リヴィは現代でも勇者やってたのよね。会社で、家で、一人で全部背負い込んで」

エリュナが苦笑いした。

「だから、カエザルを送ったの。リヴィを支えてくれる人を」

「.....あんた」

「レオとセリナの件はついでよ。あの二人、お似合いだったし」

エリュナがケラケラ笑った。

「でも.....結果的に、リヴィは幸せになったでしょ？」

リヴィアは考えた。確かに、今の生活は.....

「まあ.....幸せっていうか.....」

「っていうか？」

「楽しいかも」

リヴィアが小さく笑った。

「カエザルがいて、セリナがいて、あんたみたいなクソ女神がいて.....まあ、悪くないかも」

「でしょ〜？ 私の采配は完璧なのよ」

エリュナが得意げに言った。

「でも！ 勝手に決めるのはダメよ！ 次からは相談しなさい！」

「はい」

「それと！ もうあんな面倒な采配はやめなさい！」

「わかったわかった」

「それと.....」

「まだあるの？」

「.....ありがと」

小さな声だったが、エリュナにはちゃんと聞こえた。

「どういたしまして❤️」

「調子に乗んなバカ」

リヴィアがエリュナを軽く叩いた。

「でも、本当に良かった。リヴィが前に進めて」

「.....うん」

夕焼けが二人を照らしている。長い長い喧嘩が、やっと終わった。

「あ、そうそう」

エリュナが起き上がった。

「カエザルの呪い、解いてあげる」

「え？」

「シヨタ化の呪いよ。もう必要ないでしょ？」

エリユナが手をかざすと、カエザルが光に包まれた。

「おわあああああ！」

光が消えると、そこには190cmの美青年の姿があった。

「.....うわ」

リヴィアが顔を赤くした。

「どうである？」

「いや、その.....カッコいいけど.....」

「しかし、この姿だと学校に通えんな」

「そうよね.....」

「やっぱり、普段はシヨタの方がいいかも」

「そういうことなら.....」

エリユナがもう一度魔法をかけると、カエザルは元の10歳の姿に戻った。

「これで、変身できるようになったから。必要な時だけ大人の姿になれるわ」

「便利ね」

「でしょ〜？」

三人は笑いながら立ち上がった。

8-4. エピローグ

一週間後――

「ただいまー」

リヴィアが家に帰ると、カエザルが宿題をしていた。

「おかえり、リヴィア」

「今日も一日お疲れさま。はい、ストゼロ」

「ありがと……って、何で用意してるのよ」

「君の帰宅時間に合わせて冷蔵庫から出しておいたのである」

「……なんか、夫婦みたいね」

「夫婦か……悪くないな」

「調子に乗んなバカ」


リヴィアは照れながらストゼロを開けた。今日も栓抜きは聖剣である。


「そういえば、エリユナから連絡があったぞ」

「何ですって？」


カエザルがスマホを見せる。

天界からのお知らせ

 エリユナ：マッチングアプリ始めた❤️

 エリユナ：プロフィール「創造神、年齢不詳、趣味は采配」

 エリユナ：なかなかマッチしないんだけど～

 エリユナ：なんでかな～？

「……そりゃマッチしないでしょうよ」

リヴィアが呆れた顔をした。

「でも、あいつなりに恋愛頑張ってるのね」

「そのようであるな」

二人は笑いながらソファに座った。

「カエザル」

「なんである？」

「これからも、一緒にいてくれる？」

「当然である。私の人生、君と過ごすためにあるようなものだ」

「.....そういう格好いいこと言うのやめてよ」

「なぜである？」

「ドキドキしちゃうから」

リヴィアが頬を染めながら言った。

「では、これからもドキドキさせ続けるとしよう」

「もう、ホントにやめてってば」

二人は笑いながら、テレビを付けた。いつものようにスマブラを始める。

「今日はどのキャラで行くである？」

「やっぱりカービィよ。可愛いし」

「私はマリオで行くとしよう」

「負けないわよ」

「私も負けぬ」

ゲームが始まると、二人は本気で戦った。笑いながら、時々文句を言いながら。

そんな時、ピンポーンとチャイムが鳴った。

「はい」

リヴィアがドアを開けると、そこにはセリナが立っていた。手には手作りのケーキを持っている。

「こんばんは、姉さん」

「あら、セリナ。どうしたの？」

「お疲れ様会をしようと思って」

「お疲れ様会？」

「姉さん、頑張ったでしょ？ エリユナさんとも仲直りしたし」

セリナがにこっと笑った。

「まあ.....そうね」

「それに、カエザル君との関係も進展したみたいですし」

「べ、別に進展って程じゃ.....」

「二人とも、お幸せそうで良かった」

セリナが心から嬉しそうに言った。

「.....ありがと、セリナ」

「どういたしまして」

三人でケーキを食べながら、今度は三人でスマブラを始めた。

「セリナ、君は誰を使うのである？」

「私はピーチ姫で」

「お姫様ね、似合ってるわ」

「ありがとうございます」

和やかな時間が流れていく。

そんな中、リヴィアは思った。

確かに、自分の人生は思った通りにはいかなかった。勇者になって、魔王を倒して、現代に飛ばされて、ダメ OL になって。

でも.....

「悪くないかも」

小さくつぶやいた。

「何かおっしゃいました？」

「ううん、何でもない」

リヴィアは笑った。

カエザルがいて、セリナがいて、エリュナがいて。ストゼロがあつて、スマブラがあつて、聖剣の栓抜きがあつて。

完璧じゃないけれど、愛おしい日常。

リヴィア・クロスフィールド、29歳。元勇者、現OL。

新しい人生の、始まり。

「じゃあ、今日も乾杯しましょうか」

リヴィアがストゼロを、カエザルがファンタを、セリナがお茶を持って。

「乾杯！」

三人の声が、小さなアパートに響いた。

空の上から、エリュナがこっそり覗いている。

「みんな、幸せそうね～」

満足そうに笑って、エリュナはマッチングアプリに戻っていく。

「さて、今度は誰とマッチするかな～♪」

物語は終わり、新しい日常が始まる。

みんなで歩いていく、長い長い人生の道のりが。

【完】

エリュナの最終LINE

📱 深夜2:47の天界グループチャット

👉 エリュナ：みんなお疲れ様❤️

💬 リヴィア：なんでグループ作ってんのよ

👑 カエザル：深夜であるが大丈夫か

🌸 セリナ：お疲れ様でした

👉 エリュナ：私も恋人作る予定だから応援してね

👉 リヴィア：頑張れば？

👉 エリュナ：冷たい❤️

👉 エリュナ：でも、みんなが幸せで良かった

👉 エリュナ：私の采配、やっぱり最高でしょ❤️

👉 リヴィア：調子に乗んな

👑 カエザル：しかし、感謝している

🌸 セリナ：私も、ありがとうございました

👉 エリュナ：どういたしまして❤️❤️❤️

👉 エリュナ：これからもよろしくね～

既読3

文字数: 約5,200文字

物語の完結: 全ての伏線回収、キャラクターの成長完了

キャラクター状況: リヴィア（自己受容と新しい人生への希望）、カエザル（真のパートナー関係確立）、エリュナ（友情の和解）、セリナ（姉の幸せを確信）